



研究協議の様子(1日目)



模擬授業の様子(2日目)

令和4年度中学校武道授業（なぎなた）指導法研究事業（主催＝日本武道館・全日本なぎなた連盟、後援＝スポーツ庁）は1月28日（土）～29日（日）の2日間、日本武道館大会議室と小道場で研究者5名と連盟事務局1名が出席して行われた。

本事業は平成24年度から完全実施された中学校武道授業の充実に向け、なぎなたの特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価などについて研究協議をするものである。

■1日目(1月28日)

開講式では、和田健日本武道館振興部振興課長が挨拶に立ち、「中学校武道必修化から10余年が経過し、内容の一層の充実に加え、生徒がいかに関心を持って取り組むことができるかが課題である。そのための研究をお願いしたい」と述べた。

次に、今浦千信全日本なぎなた連盟常務理事が「なぎなた体験校が授業校として定着してきていることが伺える。これらの学校に対応できるように、指導事例や観点別評価の充実をめざしていきたい」と挨拶を述べた。

開講式後、4つの中学校における授業実践の報告と授業協力者の役割について検討した。

小椋かおり研究者からは、「中学2年生の授業では、体育の苦手な生徒も多かったが、皆、なぎなたは初めてだったので、生徒に力の差が出にくく、やりやすかった」と発表があった。

次に、鈴木理香研究者から、「授業の冒頭に礼法に関するビデオを視聴したため、生徒は自主的に靴を並べたり、道具を丁寧に扱う様子が見て取れた。

課題は、なぎなたを見たことがない教員にとって、なぎなたがアレルギーにならないようにそこをサポートする授業協力者の力が必要だろう」と発言があった。

最後に今浦千信研究者が授業報告を行った後、「学校長がなぎなたの良さを理解し、採用してもらえるように、授業パッケージを成熟し、提供できることが最も大切である。また、連盟としても授業協力者養成講習会に参加した受講者のさらなる活用を考えて行かねばならない」と発言があった。

午後は、2時間用の体験型授業パッケージ（2種）と4時間用授業パッケージの内容検討を行った。「評価の観点をいくつか提示しておいて、そこから先生が選べるようにしたらどうか」、「授業協力者のための指導案のようなものがあったとしても良いのではないかな」などの発言があり、様々な観点から検討を重ねた。

■2日目(1月29日)

1日目に検討した4時間用の授業パッケージを中心に、研究者が授業者役と生徒役に分かれて、模擬授業を行った。

授業後の振り返りとして、サポート役の鈴木研究者から「指導者は専門用語を使いがちだが、もう少し単純に説明した方が良かったのではないかな」とアドバイスがあり、これに対して授業者役の山本由加里研究者が「時間配分を考えて、もう少し大らかな授業を心掛ける必要があった」と振り返った。

その後、模擬授業も踏まえた観点別評価の課題について検討を行い、森田美穂研究者から「指導者はPCADサイクルを常に考えておく必要がある」といった発言や、今浦研究者から「今の観点別評価に慣れていきながら、なぎなたらしさをどこに持って行き、どのように外部に訴えていけるかが課題だろう。その場合、4時間で評価するのは難しいのではないかな」といった発言があり、4時間用の授業パッケージの改善点や課題を引き続き検討していくことになった。

閉講式では、今浦研究者が講評を、和田振興課長が主催者挨拶を述べ、全日程を終了した。